

地域協力による「道づくり」から コミュニティーを考える 留萌市住之江町の場合



- 凡例
- 花植え実験の重点路線
 - ミニ冬祭り会場
 - 1日除雪デー(交差点)実施箇所
 - コミュニティ除雪実施箇所
 - 1日除雪デー(高齢者住宅)実施箇所

地域が抱えている問題解決のための、新しい道路行政のスタイルとして、「社会実験」という取り組みが全国で行われている。これは、地域と行政が協同で新しい施策を考え、実際に体験することで、施策を実施するかどうかの判断材料にするというもの。

平成14年、社会実験の地域指定を受けた留萌市では、「地域協力による道づくり」をテーマにした社会実験を行った。この背景には高齢化や過疎化が進む積雪寒冷地における冬季の除雪の問題がある。行政ができる範囲には限界があるために、市民との協働の可能性を探る目的もあったようだ。冬季の除雪や夏季の花を植える等の住民活動の場を通して、実験の目的でもあるコミュニティーはどう変わったのだろうか。



1日除雪デー、交差点の除雪

夏と冬の社会実験の概要

実験の対象地区である住之江町は、面積約20ha、人口約900人(約300世帯)で、丘陵地に広がる住宅地域。国道231号から東光小学校まで伸びる300mのゆるやかな坂道が地域の顔となっている。地区内には留萌支庁、市立図書館、公園、小学校、児童センター等の公共施設があり、地区内の市道や私道には片側歩道やガードレール未設置の歩道もあり、非除雪道が2線路ある。

地区内の問題として、①雪捨て場がなく、除排雪後に道路脇や歩道、車道への雪出しが多く見受けられることから、通学や車両走行に支障を来す危険箇所があること、②町内会活動は盛んであるものの、会員の高齢化が進み若年層の参加が少ないことが挙げられた。

このことから、地域の身近な問題である除雪や夏の花づくりの活動に町民が参加することにより、交流を深め、町内の幅広い問題や課題を共有化する機会や場を生み出すことをねらいにした。

住之江町内会、小学校、警察署、留萌市、開発建設部等からなる「留萌市道路コミュニティ協議会」で基



道路空間を活用したミニ冬祭り



雪で窓がふさがっています



終わってスッキリ

1日除雪デー、高齢者住宅の除雪。小学生も除雪に参加

本事業を話し合い、町内会と事務局の留萌市からなる「企画運営会議」で詳細を決定していった。実験の内容や目的を理解してもらうため、町内を一軒一軒回って説明し、地区住民や地区内の小学生へのアンケート、高齢者世帯の聞き取りなどで住民ニーズの把握に努め、その結果を実験に活かした。実験の過程は通常の情報ツールである回覧板に加えて、道路実験専用の「かわら版」を5回発行し、情報や問題を共有化した。

平成14年夏から翌年の冬にかけて行われた6回の社会実験への参加者は450名。アンケート等への参加者は821名。各種会議等への参加者は164名。参加者合計1435名。重複分を除き約1000名の参加となった。

夏の実験

花植え実験(平成14年8月14日) 参加者80名
プランターを作り、通学路に200個配置
花の里親実験(平成14年8月~10月)
花の里親にプランターを100個配付 参加世帯70世帯
花いっぱいデー(平成14年10月6日)
家の花出し 参加世帯80世帯
子供たちによる「住之江ウオッチング」と「資源マップづくり」参加者34名

冬の実験

コミュニティ除雪実験(平成15年1~2月) 参加者7グループ19名
グループへの移動式融雪機の貸し出し
1日除雪デー(平成15年1月19日/2月23日) 参加者124名
交差点の除雪・高齢者住宅の除雪
ミニ冬祭り(平成15年2月23日) 参加者52名
道路を使ったソリすべり・雪中宝探し
かまくら、わたあめ、甘酒の提供

町民が取り組んでわかった地域の良さと問題点

「当事者」となって取り組む

留萌市道路コミュニティ協議会の前会長、石塚俊彦さんは、地域の人からの聞き取りやアンケート結果から、雪に関する問題が多いことに驚いたという。その問題解決のために行った危険箇所の除雪や独居高齢者宅の除雪。なかでも、4m未満の除雪が入らない道を対象に行われた移動式融雪機によるグループ除雪の試みは、近隣のコミュニケーション、雪のトラブル解消に効果があった。この実験は、除雪の問題を、地域共通の問題としてとらえ、自分たちでできる事は自分たちで解決していこうという動きにも繋がったという。この移動式融雪機を使用した経験を活かし、留萌産の融雪機を造ろう、という新しい事業へのチャレンジも始まっているそうだ。また、子供たちで行った「住之江ウオッチング」や「資源マップづくり」は地域の良さを見直すいい機会になり、石塚さん自身にも発見があったそうだ。地元にある地域資源や生活文化を掘り起こしながら地域づくりに活かしていく試みは、今後とも大切になっていくだろう。

住民の役割、行政の役割

事務局となった留萌市企画財政部企画調整グループリーダーである遠藤秀信さんは、「地域の問題の洗い出しを、地域の人にやってもらった。このことが重要」と、企画の段階から住民参加による合意形成を図っていくことが大切という。住之江町での効果をふまえ、全町内会に、コミュニティ除雪の提案をしてみたところ反響が多く、今冬は12町内会で移動式融雪機を活用した地域除雪が行われる予定だそう。留萌開発建設部でも移動式融雪機を6台購入し、国道の歩道部分の除雪を住民と協力して行う予定だ。このような取り組みを幅広く展開することで、行政でカバーできない部分の除雪対策を地域住民の問題として解決策を検討していくことが期待され、その活動を側面から支える行政のしくみづくりも大切だという。留萌市では平成15年3月末から「留萌市市民活動の推進に関する条例」を施行して、市民参加のシステムづくりに取り組んでいる。



花植え実験、通学路にプランターを設置



花植え実験、みんなでプランターづくり



住之江ウオッチングとマップづくりの参加者



町内を歩けば発見がいっぱい

留萌開発建設部では、平成15年に地域住民の協力を得て、拡幅工事後に設けた植樹帯に約3千本の花を植えた。道路1課第2調査係長の嘉見誠一さんは、「植えてほしい、じゃなくて、職員も1人の市民として参加して、みんなで協力して町をきれいにしようということです。小平では、養護学校の生徒が、種から育てた花を一緒に植える計画もありますよ」と、地域協力による道の環境整備がどんどん広がってほしいという。行政だ、市民だという前に地域の一員として何ができるのかということが根底にあるべき、ということだろう。

役割の見えるコミュニティー

平成15年12月8日に留萌市で行われた「北のみち普請」ワークショップで、留萌市道路コミュニティ協議会の前会長、石塚俊彦さんが、「社会実験が終わってみると、町内の連帯感が一層強まり、みなさんとてもいい顔になっていたことに気づき、改めてこの町の良さ、町内の底力を再認識した。実験から得た地域のつながりや周りとの連携を今後へ活かしたい」と発言していた。



「北のみち普請」ワークショップで活動を紹介します石塚俊彦前会長

「沿道の花で飾る」「地域住民で除雪する」という、小さな地域での小さな活動だからこそ、人それぞれの役割が見えてくる。この社会実験は、地域のいい所を見直し、地域住民の生活を支えるのに何か必要かを住民がしっかりと考えていくためのきっかけとなったようだ。コミュニティーの発展は、住民自らのボトムアップが基本。本当の意欲やアイデアが生まれてくる場づくりが重要な鍵になるのではないだろうか。

参考資料

北海道留萌市「地域協力による道づくりを考える社会実験」平成15年3月刊
写真は住之江町かわら版総編集より